

0-9-12

2年間の看護診断導入に向けた集合研修の取り組み

釧路赤十字病院 看護部看護記録委員会¹⁾、日本赤十字北海道看護大学²⁾

○金澤 尚子¹⁾、河原田菜子²⁾

【目的】看護診断を正しく理解し看護実践に活用することができる。目標1)看護診断過程の基礎について説明できる2)NANDA-Iの看護診断名を正しく説明できる3)各種の臨床事例から妥当性のある看護診断名を導き出せる【研修方法】期間は平成25年12月から平成27年12月までの2年間。企画運営者は看護部看護記録委員会。対象者は看護管理者・部署記録委員・チームリーダー・サブリーター・看護大学等で看護診断を学んだ方・継続して看護診断学習ができる方。研修内容は看護診断に関する講義から始まりその後は各部署で入院頻度の高い事例を輪番制で作成し自己学習→部署学習→集合研修での他部署間との意見交換→外部講師による解説の4段階で事例展開。アセスメントには概念枠組のゴドンの11の機能的健康パターンを活用しNANDA-Iの看護診断名で仮診断や確定診断を導いた。各研修の終了直後にアンケート結果を基に評価。アンケート内容は研修の目標達成度を理解の程度として「できた」「ほぼできた」「一部できた」「できなかった」の4段階で評価。【倫理的配慮】アンケートは個人が特定されないよう無記名とし回収をもって同意とした。看護部と施設長の承認を得た。【結果】全7回研修に全部署から約60~80名が継続参加しA病院で使用頻度が高い25種類の看護診断名を学習した。アンケート結果から「看護診断とは何かわかったか」91%「看護診断を行う利点が理解できたか」91%「看護の守備範囲を意識することができたか」91%「看護過程での看護診断の位置づけがわかったか」88%「NANDA-Iの定義がわかったか」86%と高い割合で理解したと回答があった。【考察】臨床現場での看護診断研修には身近な事例展開が理解しやすく効果的であり看護実践に活用することができる。と考える。

0-9-14

体験型課題解決ゲームの学びを看護部全員参加の実践へ

下伊那赤十字病院 看護部

○小池佐和子、田口 志保、松下 弥生、伊藤みほ子

【背景】一人の意見に誘導される。強い言い方に反論できない。反論するとやり辛くなる。などお互い意見の交換を苦手としてきた風土の打開を目的に、自由に言い合い聴き合うことで課題解決に至る体験型課題解決ゲームに取り組んだ。その場にいるメンバーが集中して力を発揮しなければ正解に至らない。この体験を看護職全員で共有した。【目的】言い合い聴き合い考え合う。ゲーム体験での学びを活かして身近な課題解決に看護部全員で取り組む。【方法】各々の思いをグループ内で語り合う中で、課題を1つに絞り、自分達で解決の方向を探り行動を興した。各グループの自主性を重視し、看護部はグループ活動の時間確保や勤務調整。適時ニュースレターを発行し喚起しつつ継続的に支援し、成果報告会とアンケートを実施した。【結果】課題は時間外勤務、言葉使い、身だしなみ、等々全てのグループが発表に至った。毎月定期的に話し合いを繰り返した、時間の経過を忘れるほど語り合ったグループもあれば、1回の集まりで終わったグループもあった。アンケートは、10点満点で「充分意見が言えた」7.8点。「充分聴けた」8.2点。「楽しさ」6.9点。グループの「雰囲気」7.7点。回数多く話し合いの場を持てたグループの方が、少ないグループより「楽しさ」「雰囲気」が2.8点高く、解決に導けた」が3.2点高い。【考察】話し合いに参加している自分に眼を向け、意見交換の必要性、集中し協力し合う事の大切さをゲーム体験から学び、そのまま自分たちの抱える課題に移行できたことが、満足度の高さを残すことを可能としたのではないかと考える。また十分な意見交換を繰り返すことで課題は解決できた。この思いを多くの職員が共有していることは今後大きな力になると感じる。

0-9-16

看護助手目標管理における院内留学の活用

大津赤十字病院 看護部

○峯尾 隆子、狩野 鶴代

【はじめに】本院では看護助手の目標管理を係長が支援し実施している。平成27年度看護助手会議において看護助手は自ら院内留学について希望した。係長の支援を受けながら11名が院内留学を行った。院内留学を行った看護助手は、他部署の工夫をしている点を学び、より良い看護助手業務につなげる機会となったと考える。【院内留学の実績】1. 院内留学の学びを係長とともに自部署の看護助手業務の目標達成や改善につなげることが出来る。2. 研修部署の看護の特徴、協働業務における管理者の期待や思いを知り、自部署における看護助手としての自分の役割を振り返ることが出来る。ことを目標に、院内留学を希望する看護助手が何を学ぼうとしているのかを部署の係長が確認し、留学先の係長と調整を行う方法で院内留学を実施した。看護助手の学びは留学先のカンファレンスにて係長が引き出せるようかかわった。院内留学を終えた看護助手は、自部署の師長・係長に報告し、支援を受けながら実践し内容を年度末の実践報告会にて発表することが出来た。具体的な内容は、「看護師との情報交換について」「看護助手のリーダー制について」などをテーマに院内留学し自部署でどのように改善できたのかを発表することが出来た。【終わりに】看護助手の目標管理において、院内留学を取り入れたことは、看護助手自らが他部署での業務の実情を知る機会とできた。また係長がその内容をカンファレンスで意味づけし学びとすることが自部署での業務改善とすることが出来たと考える。

0-9-13

アクションカードの有効活用に向けて — 地震車での災害訓練を通して —

小川赤十字病院 看護部

○根岸 知里、茂木ゆかり

【はじめに】A病院手術室では平成25年に看護師を対象としたアクションカード(以下AC)の作成、平成26年には多職種参加による机上・実動シミュレーションを実施した。その中で実際の揺れはどの程度なのか、ACは実際に活用できるのかと疑問を感じた。そこで地震車を使用し揺れをイメージしてもらおうと同時に室内・地震車訓練を行ないACの実用性を検証し活用方法の改善点を明らかにした。【目的】地震車にて揺れをイメージできることにより、室内・地震車訓練を通しACがどのように使われているのか検証する。また、アンケート調査にて現在の活用方法と問題点を分類分けし明らかにする。【方法】期間：平成27年6月室内訓練、7月地震車訓練を実施し、各終了後アンケートを配布。対象：手術室看護師9名。倫理的配慮：研究の目的と方法、拒否・途中辞退が可能であり、それによって不利益を被らないことを説明し同意を得た。【結果】室内訓練では、ACがあつて良かった・心強い・迷った時に必要・ACを見ていないので把握していないなどの意見が出た。地震車訓練では、行動に移しやすい・なかつたら焦っていた・ACを記憶していた・見ている余裕がない・両手がふさがり出せなかったなどの意見が出た。また、揺れを体験し、器械台を押さえることに必死・怖くて周りを見る余裕がなかった・姿勢を低くし膝をつき転倒防止に努めたなどの意見が出た。訓練で覚える必要がある・定期的に見直せるシステムがあると良いなどの意見もあった。【おわりに】地震車による揺れを体験したことにより災害時の行動がイメージでき、災害に対する意識の変化につながった。また、ACの認識・周知が低かったことが明らかになった。今後、ACの活用方法の再確認や効果的な活用に向けた定期的な読み合わせや訓練が必要である。

0-9-15

看護助手研修がもたらした看護助手の意識の変化

古河赤十字病院 看護部係長

○中山 玲子、大橋 久子、大野由美子、奥津 町子、小林裕紀子、山本みはる、長尾 佳代

【はじめに】当院では平成24年度急性期看護補助体制加算を受け、看護助手に研修を行った。研修開始から4年が経過し、看護助手は役割に対する意識が高まり主体的に会を運営するなど仕事への姿勢に変化が見られた。そこで、看護助手の意識の変化に注目しアンケート調査を行ったので報告する。【目的】研修が看護助手の意識にどのような変化をもたらしたか明らかにする。【方法】看護助手22名を対象にした、仕事への意識に関する無記名の記述式アンケート調査【結果】アンケート回収率は100%(22名)であった。研修を受けて仕事に役立ったことは、助手業務の意味がわかった、知らない事がわかった、患者さんとの関わり方がわかった、トランスファーシートの活用で仕事が楽になったなど研修を活かしている意見が多く見られた。また、研修後の仕事の充実感、考え方も豊富になり、自信をもって行動できるようなった、学びとったことが実践として活かされた、安全への配慮に目を配るようになったと仕事にやりがいを感じる意見が多かった。質問の自由記載からキーワードを抽出すると(役割意識の向上)(看護ケアの知識拡大と活用)(患者満足)(承認)(やりがい)であった。【考察】看護助手は、研修で学んだ知識や技術に自信をもって活かしていた。また、患者からの感謝の言葉やチームの一員としての医療者からの承認により、仕事に対する意欲やモチベーションの向上に繋がったと考える。さらに、研修内容は看護協会規定された以外に看護助手自身のニーズにあわせた研修などで企画運営などに積極的に参加するチームワークの構築と知識向上になった。看護助手が更にいそいそとその役割を果たしていけるように、看護助手の主体的な活動を支援していきたい。

0-9-17

臨床看護師が看護学校の演習に参加することの意味

諏訪赤十字病院 諏訪赤十字看護専門学校

○田村 奈々

【目的】本校では、2年次の保育園実習前に小児の生活援助技術の演習を行っている。ねらいは、小児への技術(調乳、ベビーモデルを使用しておむつ交換と授乳、離乳食、抱っこ・おんぶ)と母親への指導技術を学ぶことである。学生は、授業で技術の知識・方法を学びグループ毎計画を立案、教員に指導を受け練習し、演習に臨む。より臨床に即した技術を学べるように、実習病院の臨床看護師(小児科勤務3年目)1名におむつ交換のグループの学生支援を依頼した。演習に臨床看護師が参加することが自身にとって、どんな意味があるのかを考察したので、ここに報告する。【方法】演習に参加した臨床看護師に半構成的面接法を実施。研究への参加、発表について、倫理的配慮を説明し、同意を得た。【結果および考察】看護学校での演習への参加は、看護師にとって以下の意味がある。<学校での看護学生の様子がわかり、実習指導のモチベーションがある>学校での学生の様子は病棟とは違うことがわかった。学校は安心してできる場所であり、伸び伸びと学習していたことから、病棟実習では緊張していることが理解できた。また、説明や資料などの学習や技術の練習を積んで本番に臨んでいることもよく分かった。また、学生がアドバイスを素直に受け入れ、技術が向上する姿に教える喜びを感じ、臨床から来たことだけでも喜ぶ学生に親近感やかわいさを感じていた。これらの体験は、学生の理解につながり、実習に来た時に実習指導を意欲的にできる。<自分の看護技術の根拠や大切にしていることを振り返るチャンスとなる>学生に教えることや学生からの質問を受けることで、日常的に実施している看護技術の根拠や自分自身が小児看護で大切にしていることを再確認でき、リフレクションの効果がある。

10月20日(木)
一般演題(口頭)抄録